



左馬ノ介はこの一家に来てから――否、かの暗殺組織に所属している最中にも、また師のもとを離れ、己が器量でこの郷で立ち回っていた時代にもまるで感じた事のない、いまだかつてない戦慄を身に覚えていた。

それは、今は姉さんと呼ぶことになった少女に対して、彼女が何ら不都合なく生きて、刀を振るえるようにと、あらゆる面の能力に秀でることを己に課してきた彼――織田左馬ノ介にありうべからざるクライシスだった。

何が彼の身に、そしてその一切の破碎を許さない刃物のような精神と心に起こったのか。

目の前で繰り上げられる狂騒を彩るのは、先程この獅子堂の屋敷に到着した、本日の遠方からの客人。刀郷では比較すると女性に普及率の高い、洋服を身に纏った少女。髪は短く、少し明るい色。見るからに明朗活発という目つきと表情をした彼女は、左馬ノ介や雪絵と似通ったくらいの年ごろであると、その体格から推測できた。

その少女が、今現在、何をしているのかといえば、招いた張本人であるところの春花姐さんに抱きついて、一向に離れないのである。

しかもただ抱きついているのとは訳が違う。それは――周囲の人間が見るその様子は――まるで離れて暮らしていた家族に再会したかの様。自らの全身を使って相手への親愛を顕わし、会えたことを喜び、自らの春花へ向ける慕う感情を、体いっぱい表現しているかのような。

熱烈。

と、そう形容することにはばかりがない。そういう来客人、仁美のアクションだった。

それで何が左馬ノ介にとって、恐れ慄く事態なのか。

それは、ありていに言って、雪絵が怒っているのだ。

怒っているという程に表面に出て、雪絵が怒りの相を作っているという訳ではない。ただ、こう、大きく身を動かさずに、わなわたと肩と手を奮わせて俯いているのだ。

「……………」

左馬ノ介とて、雪絵が春花に抱く想いというモノを、彼女から幾ばくか耳にしている。もとより彼としても、昨年末の一件を顧みて、雪絵のその心情を読み解けていたのだ。雪絵のこれまでと、春花から受けた衝撃と感動の程を想像するに、彼女の内での春花の存在がいかにばかりの大きさと質量であるのか、左馬ノ介には苦も無く察せられる。

だからこそ、この状況。

(姉さんが、怒りに打ち震えている……)

うらやましい、とか思っているのかな。

と場違いにも、人として当たり前と思える心の動きを当てはめて考えて、しかし『何を呑気な』と左馬ノ介は考え直す。これはまかり間違えば、衝突必至の危機的状況ではないか。

それも左馬ノ介の心が現状に危機感を抱いている理由だった。

しかし、お客に対して自分が発言できる段階でもないしな、と左馬ノ介は仁美の振る舞いに慄くばかりだった。

座敷の入り口で、同様に状況を見遣る白峰に視線で助けを求めてみるが、彼は左馬ノ介と違って、あえて客人の振る舞いに咎める意思が感じられない。

どうやら、この客人の出方にある程度の想像がついていたという塩梅で、左馬ノ介は尚更現状に慄くしか手が無い自分を情けなく思う。

(姉さんがぶちきれてしまいますよ……これはもう、姐さん！)

しかしそこは春花、左馬ノ介の視線の意味に気付いたわけでもないのだが、大人の対応。

「仁美ちゃん、元気そうね。でも相変わらずの御転婆ぶりは、もう少しどうにかなさいな」

と、仁美の肩に手を置いて、やんわりとその情熱の発散をいなした。

「それに今日あなたを招いたのは、あなたと私の旧交を温めるためではないのよ。文にも記したように、今日は紹介したい子がいるのよ」

穏やかな春花の言葉に、一度は唇を尖らせて不満をあらわした仁美だったが、次いで春花の言葉を呑みこむ。そして強気な笑みを作って春花を見返す。

「ええ、ええ。春花さんが会わせたい人がいると言うから参ったのですし、そっちにも興味はあるにはあります。で、誰です？ 私は目が肥えていますよ」

## 第一章 太刀の参

---

そう言って、春花からぱっと離れて、周囲を見回すように後ろを振り返る。

和室の応接間に合う、品の良い調度品で整えられた部屋と、明け開かれた襖戸。その先の広い庭に、芝生と白い草花、青々とした葉を茂らせる樹木が見え、季節の瑞々しさを感じさせる。そして視界に見知った壮年の武俠、白峰が渋い顔をして立っている。離れた側には先程から案内をしてくれた、新手に見る変わった髪型をした少年。

まさか、この男の子を紹介したいというのだろうか。先程から見るに、佇まいは年不相応なモノを感じるし、割と可愛い顔をしているが、だとして春花さんの意図はなんだろう、と仁美は考える。

しかしこの少年、今視ると顔が青ざめているけれど、と思っていると、床柱を背に座した春花の次座に、一人の少女が座っている事に仁美はようやく気付いた。花模様の赤い単衣に、梳いておろした長い黒髪の少女。顔立ちは整っているようだが、今は何やら顔を伏せていて、目元が窺えない。

仁美がそんな雪絵を訝し気に見遣っていると、春花が頷いてみせた。

「仁美ちゃん。この娘のことは、少しは耳にしているかしら。少し前にうちの組に入った子よ。じゃあまずは、座ってお互いに自己紹介をしましょうか」

女中がお茶を運んで来たのを受けて、春花はパンツ と手を打ち鳴らして微笑んだ。

「ふうん、この娘か」

雪絵を立ったまま見据えて、下から上に値踏みするように視ていく、そして、

「.....なんか根暗そうね」

と、仁美はそんなつぶやきを発した。

その不穏な言葉に、白峰が庭の方を省み、女中は顔色を変えずにそつなく給仕を済ませると、静かに立ち去って行った。春花が僅かの静寂の後に言う。

「そんなことないわよっ この子はとても面白い子なんだから！」

つくろった平素な顔でそう言う春花。一方でその遣り取りを耳にしながら、しかし左馬ノ介はまったく顔色を変えずに仁美を睨み据え、心の中で独りごちていた。

(.....あなたが呑むその茶に、毒でも盛って差しあげましょうか、お嬢さん)

そして、次の瞬間にはふう、息をつき、ハラハラと云った心持ちで雪絵に視

線を向ける。

雪絵は黙ってうつむいたままだ。

その様子に左馬ノ介は心配になる。

「では、互いに名乗りを」

春花が場を仕切った。

それを受けて、まずは仁美が春花への礼儀としての挨拶を述べた。春花へ向き座し、右手の平を前に指し出し、口上を紡ぐ。その眼は礼儀を示す相手を見据えている。

「御控えくださいまし。私はお招き預かりました者に御座います。お控えくださいまし」

緊張感を漂わせた仁美。

少女らしからぬその様は、侠客の家の娘なのだと感じさせて余りある。春花も座し、右手の平を指し出し返答する。

「当家を預かる者に御座います。お控えください」

「左様仰せられ、御言葉の重るばかりに御座います。姉上様、お控えくださいまし」

「再三のお言葉に従いまして、控えます。手前、仁義前後を間違えましたる節は、ご容赦くださいまし」

春花が仁美に返した。

「早速お控えくださって、有り難うございます。斯<sup>かよう</sup>様、座<sup>ま</sup>し在して親分様に御挨拶、失礼ながら御免なさいまし」

「お言葉御丁寧に御座います」

「有り難うございます。おあげなすって」

「あなたからおあげなすって」

「それでは困ります」 仁美が固辞した。

「では、御一緒におあげなすって」

そこで仁美は視線を切らずに、相手の動きを見たゆるりとした仕草で開いた右手を引く。その動作に春花も合せて自らの右手の平を引いた。仁美が 「有り難うございます」 としめた。

次いで、坐したままに手を使い躰を左に向け廻すと、今度は拳をついて、仁

## 第一章 太刀の参

美は雪絵に頭をさげた。

「向かいましたる姉上様とは、今回初めての御目通しで御座います。手前、<sup>しょうこく</sup>生国は日の本の国刀郷秩父、関東は吹きおろし。西方大阪松原に住まいを構えます、<sup>さやか</sup>清家組十七代目を継承します、<sup>まさし</sup>清家雅嗣が娘に御座います。姓は清家、名は仁美。稼業昨今いまだ勉強修行中の身に御座います。後日に御見知り置かれ、行く末万端、御懇意にお願いします」

ひと息に、一度の噛み間違えもない流暢な言葉で仁義の口上を切った仁美。だが、それを受けた雪絵が返したのは、

「雪絵よ。坂本雪絵。よろしく」

と、述べて、膝に手を置いて軽く頭をさげたのみであった。

「……………それだけで？」

どこか冷めた<sup>いろ</sup>彩が顔に走る仁美。

対照的に雪絵は平時のままの表情をしている。

刹那——長いスカートの裾を乱暴に払い、仁美が片膝を立てて、勢いよく立ち上がろうとした。

部屋表に坐した白峰が片目を剥き、左馬ノ介も片足を立て動こうとした。

——が。

「仁美ちゃん。お待ちなさいな」

温度の下がった……いや、それは表面だけのことで、きっと内面はマグマの様にグツグツと熱が煮え滾っていた事だろう……仁美の顔以上の、春の冷たい夜風のような春花の音が、場の一同の耳に届いた。仁美はその声の主を見遣り、反意を述べようと口を開く。

「言いたい事はよく分かるわ。けれど、この子は侠客の一家に来て間がない。ゆくゆく、しっかりと礼儀と仁義を仕込むつもりよ。今回は大目に見てあげて、仁美ちゃん」

自分の発言を制して出たその言葉を聞いて、仁美は一旦雪絵を睨む。納得がいかないと言わんばかりに、じりじりと、ぎりぎりと、視線が刃物を刺すようだ。

「……………はい」

そして、不承不承と頷き、雪絵の正面座にどかりと尻をおとした。

## 第一章 太刀の参

---

現状は静まった。

しかしこれは、雪絵と仁美……二人の今後の間柄を象徴する事にはならなければ良いが、と左馬ノ介も白峰も気が気ではなかった。

(けれど、姉さんはこの清家のお嬢に意趣返しがしたかったというよりも、単に侠客の礼儀挨拶の心得がなかつただけで……)

波立った部屋の空気が、茶托の上の湯気立つ水面を揺らしていた。しかしそんな事はどこ吹く風で、春花はにこやかに若い二人を見つめている。そして、白峰と左馬ノ介に手で座るように促す。それに応じて白峰と左馬ノ介が部屋の出入り口を挟むように坐した。

その客間で、春花が話始めた。

不機嫌を隠そうともしない仁美と、整っているが能面のようにのっぺりとした表情の雪絵の二人。

しかし、春花がそうして話し出すと、両者ともに瞳を輝かせて彼女を注ぎ見た。

「雪絵も知っていると思うけれど、我が獅土堂の組は、はばかりながらこの郷の半分を治めているわ。西半分ね。そして西側は昔から、本国西方との交流に強く、太く拘わっているの」

「うん……、みたいだね」

かつて、拠点を転々とし、刀郷のあらゆる土地で生活をしてきた時期のある雪絵は、地元根付いていないために、だからこそ地域との交流というモノに疎い。それは心無く、人に遣われていた少女だったという事も含めての、先日迄の彼女の実態だった。しかし、今年に入ってから、春花をはじめ……それまでは左馬ノ介が担っていたそうした知識と係わりを、義弟となった彼からも教わり、雪絵も少しはその方面に明るくなった。

頷いて続ける春花。

「それで、その交流、交易の要となる西との橋渡し——パイプ役を昔から長く続けている組があつてね。それが仁美ちゃんの生家である、清家の組なのよ」

「へえ……じゃあ、この娘は、その組のお嬢さんか」

静かに正面の仁美を見つめて、雪絵はつぶやく。仁美はその視線に対して、顎をくいっとあげて胸を張ってみせる。そして、

## 第一章 太刀の参

---

「お役目、身の引き締まる思いで、父も一家も、アタシも日々務めさせていた  
だいております」

首を春花の方に向けた瞬間に、宝石のように煌めく笑顔になり、可愛らしく、  
楚々としてそう言う仁美だった。

(なんて二面性だよ)

左馬ノ介はそんな感想が口から漏れるのを、なんとか堪えた。

しかし、仁美の態度に雪絵は表情を変えない。

二人の少女の様子に春花は微笑んで、茶碗を手に取る。落ちついた動作でゆ  
っくりと、椀から伝わる温度を手で受けている。

「獅土堂は刀郷の発生の後にこの郷を束ねてより、清家の組とは金蘭の仲よ。  
そして、それはこらからも両家にとっての善き在り方であると、私としても嬉  
しいわ。二人とも、分かるわね」

ゆっくりとお茶を呑んで、ほう、と息を吐く春花。

その姿に何か感じるモノがあったのか、仁美が『私もいただきます』と  
嬉々として茶碗に手を伸ばす。それに続くわけでもないのだが、雪絵も春花の  
様子を視て、同様に何らかを思ったのだろう、彼女も静かに茶を呑んだ。

その様子を視て、春花が柔らかな笑みを二人に向ける。

「ふふ。和んでいるみたいで嬉しいわ。……じゃあ、あとは若い二人に任せま  
しょうか」

そんなことを言うと、ゆるりと茶碗を置いて、綺麗な動作で立ち上がる。着  
物の裾を慣れた手つきで整えて、歩み出す。

「……え、ちょっと、春花さん!!」

急な状況の変化にあわてた様子で、仁美が身を起こして春花に手を伸ばす。  
それに取りあわず、春花は部屋の敷居を超えると、控えている白峰と左馬ノ介  
に目配せする。

「よいのか」

「よいのよ。じゃあ、しばらく二人で楽しくおしゃべりしていてね。仁美ちゃ  
ん、その子に色々教えてあげてね」

春花は笑って首を傾げ、去っていった。白峰と――部屋に残る二人を一瞥し  
て左馬ノ介も――それに続いた。



## 第一章 太刀の参

---

お茶の湯気と静寂が満たす部屋に、二人の少女。

起こした躰を座に戻して、仁美は茶菓子を乱暴な所作で食べて、茶をすする。今日の為にシマの和菓子屋に用意させた、噛み砕くのが惜しいほどの雅な造形をした菓子と、来客用にとっておいた特上煎茶だ。そして仁美は先程までの正座ではなく、胡坐だ。

「……春花さんも随分なムチャ振りもあったものね。話をしろというのはわかるわよ。私も子供じゃないんだしね」

最初、雪絵はそれが仁美の独り言だと思って聞いていた。先程からの彼女の態度を目にしていた限り、どうも自分と友好的な会話をする相手には見えない、と思ったからだ。そういう印象だから、この人は自分を相手にしないのでは、と勝手ながら思っていた。

しかし、仁美の発したセンテンスに、雪絵は何かしらの感じるモノがあったのだろう。小首を傾げて、正面の少女に問うた。

「あなたは、子供じゃないの？」

「?!……………どういう意味よ」

「……そのままの意味。歳、子供じゃないの、あなた」

雪絵の発言に、仁美は「はっ！」と笑いとぼして膝を叩く。

「……あんた、雪絵とか言ったっけ。歳はいくつよ」

「……………十……二、くらい」

「十二歳？ 私は今年十四歳よ。あんた、坂本の姓を名乗るくらいだから、獅子堂の、それも春花さんの類系になったのかしら。だったら、武門の子としていい年齢じゃない」

「いい年齢って？」

「はあ？ あんた、常識がないのか！」

おかしなことを言っているつもりはまるでない様子の雪絵の顔を視て、仁美が片眉を力を込めてあげる。それでも雪絵がなんら動じた顔色を見せないなので、仁美は肩を下げて嘆息する。

(春花さんが言っていた、教えてあげて、っていうのはそのまんまの意味ですか……)

## 第一章 太刀の参

---

「……いいわ、教えてあげる。かつては武家の男子は、十二歳を超えたら元服ってって、一人前の大人として認められていたの。私達は女だけれど、武侠として十分にその年齢に達している。いわばもう子供じゃないのよ。わかる？」

小さく頷いてみせる雪絵。そこに仁美は意地悪そうに続ける。

「それともあんた、まだないの？」

「……何が」

「お赤飯を炊くような事よ」

「ああ、生理か」

「それは知ってんのかよ！ ……その口ぶりだと、あったのね」

開けっ広げな雪絵のモノ言いに、若干冷や汗をかく気分で仁美は返した。

「ま、まあいいわ。ならあんたも私も子供じゃないんだしね。要するに、組同士の付き合いは大事だってことよ。そのためなら大概に無礼な奴とだって、茶菓子をつまんで茶を呑んで、しゃべってやるわ」

胸を張る仁美に、雪絵は静かに思うところを述べてみる。

「あなた随分、春花さんに向ける態度が違う」

ふん、と鼻から息を吐いて、仁美は応える。

「あんた、無礼な奴は例え無礼で返されても、文句は言えないってことを憶えておきなさい。侠客社会ってモノはね、無法で通っていながら、その実厳格なの。しきたりとかあるの。組に初見で挨拶をするのに、さっきのあんたみたいな態度をとったらね、その場でフクロにされても仕方ないんだからね」

ほほう、と頷く雪絵にビシッ と仁美は指をさす。

「だからあんたみたいな無礼者とは、正直まともな話をしたくないわね」

じゃあ、などと雪絵が反応をよこす前に、仁美は言葉を継ぐ。

「でも、それじゃあ場合によって、仁義が成り立たないこともあるのよ。今の場合はウチの組と獅士堂一家の関係がそれよ。多少相手が気に入らなくても、面と向かって話をしなくちゃいけないのよ」

「……………そうなの？」

「そうなの！」

そこで大きく息をついて、仁美は膝に肘を置き、頬杖をつく。面倒臭そうな表情で、入り口の庭を見つめる。黒髪と赤い着物よりも、空の青と芝生の緑、

## 第一章 太刀の参

---

草花の白を視ている方が心おちつく気がする。そんな風に話している雪絵ではない方向を見つめる。

しばしの沈黙が客間を支配する。

しん、とした中を春の風が軽く撫で、鳥の声が穏やかな午後を彩る。

「……………」

「……………」

ふ、と吐息の漏れる音。

「あ——ッ もう！ 何かしゃべりなさいよ、あんた！ 招いた側でしょ？  
私は客だぞ！ ふざけんなッ！」

突然声を立てて膝を殴り、仁美が雪絵を睨み付けた。

ふざけていないのだが、と思いつつも、そう言われれば雪絵も黙っているわけにはいかないか、とこくりと頷いて声を出す。

「あなた、春花さんに愛想がいいわね」

「……まあねえ」

なんだそりやまたそれか、と思いつつも、仁美は言葉を継ぐ。

「別に獅土堂の頭梁におべっか使ってるってわけじゃないのよ。勘違いしないでよね。私はね、純粹に春花さんが好きなの」

「……………好き？」

「うん、だって、あの人カッコいいじゃない！」

頬を紅潮させて、昂揚したような得意気な顔の仁美。

その言葉と表情に、雪絵はほとんど困ったという顔をして、頬に手を当てる。別に茶菓子をお口に作るタイミングが見出せない事に、いい加減困憊した訳でもあるまいに。

「カッコいい……って何？」

「あんたマジか?! ……はあ、一体今迄どんな教育を受けて来たんだか。春花さんが苦慮して、こいつの話し相手の一人も作ろうとするわけだわ」

「……いいから、どんな意味なの？」

「どんなって……」

それよりも、仁美は目の前のこの鋭い目つきの少女が、自身が馬鹿にされて

## 第一章 太刀の参

---

いることも気に掛けないのか、と半ば呆れを感じてきた。

「はあ。……えっとね、あんた、今迄誰かを好きになったこととか、ないの？」

「……………」

「ないみたいね……。ま、いいわ。あんたはそういう奴っぼいんだと分かってきた」

少しの間考えてから、仁美は口を開く。この相手には、一から噛み砕いて説明する必要があるだろう、と了解して。そして同時に、自分は何故こんな面倒な事をしているのだろう、と心の隅で思いもしながら。

「カッコいいって感じるのはね、見栄えや体裁が整っていたり、キマツテいたり、粋だったりっていうのも人によってはあるんだろうけれど、私はね、肝心なのは強さと華麗さだどつくづく思うのよ」

腕を組んで記憶の中の『それ』を思い出しながら、仁美は話す。

「それでね、見た目に顕れるそれだけじゃなくて、内面——『心』がそうである事。それにしびれて、魅せられて、『心』震えて、その人を好きになるのが、カッコいいって感じることだよ、きっと」

だいたいこんな感じかな、と仁美自身まったく経験のない内省言語化に息をつきつつも、これで伝わったのだろうか？とも考えて雪絵を見遣る。

「……………」

説明してくれた仁美を見つめ返して、雪絵はしばらく固まって黙り込む。怪訝に思った仁美が、雪絵の顔を覗きこむと、ようやく頷いてみせた。

「うん……。カッコいい、か。分かった」

表情を変えずに、しかし妙に力のこもった声で言うので、仁美は嘆息して

「あ、そう」と脱力した。

「あなたは、春花さんをカッコいいと思っているんだね」

「……………まあ」

面と向かって問われると、少し気後れしてしまうのは何故だろう、と仁美は思う。

「春花さんはカッコいい」

「……うん」

「私もそう思うよ」

## 第一章 太刀の参

---

「おおっ!」

そこで仁美はここに来て、初めて雪絵に対して破顔してみせた。

「なによ、なによ。あんた、少しは話が分かるじゃん！ 何々、あんたも春花さんの殺陣に惚れちゃった口？」

前のめりで畳に両手をついて、雪絵に向かって身を乗り出してくる仁美。その勢いに動じることなく、雪絵は無表情で返す。

「.....そうみたい。私は春花さんの殺陣に.....その刀技に、震えた。身が震えて、心が出来たの。あの人の殺陣を視て、とつても、感動したの」

「そっかあ。あんたみたいなトウヘンボクの朴念仁で常識無しでも、人並みの心はあるんだって感心するわ。いや、それがあの人の凄さだよねえ」

「人並み.....？ 心がある？ 私にも.....」

うつむいて眩く雪絵に、仁美は不思議そうに顔を覗きこむ。

「うん？ そんなの当たり前なことですよ。人が人として生きていれば、大なり小なり心はあるものよ」

「.....そうかな.....」

「心といえば、春花さんの刀技には、そういうモノを強く感じると思わない？」

雪絵の様子に頓着せずに、仁美は気分が良さそうに話を続ける。

「春花さんの刀技はさ、迅くて精緻で、それでいて迷いや躊躇を振り払うような、心の強さがあると私には感じられるんだよ.....えーっと、あんたはどう思う？」

そこで仁美は、目の前の少女の膝の上の、握られた両の拳に気付く。

小刻みに震えているのだ。

よくよく見ると、躰もなにやら同様に震えている。前のめりになっていながら、だからこそ仁美は気付かなかったということか。しかし、何を打ち震えているのかが、彼女には見当がつくような、つかないような。

だから仁美は 「何事かな？」 と雪絵の顔を覗きこむ。まじまじと、ぐりぐりと覗きみる。

すると、

「.....んぐっ .....うっ .....くっ」

## 第一章 太刀の参

---

雪絵は顔を真っ赤にして、綺麗な顔をくしゃくしゃにして、嗚咽を堪えて震えだした。

さすがにその変化に、仁美もドキリとして身を起こす。

「ちょっ、あんたどうしたの。何？ 泣きそうになるのを堪えてるみたいだけれど、ホントどうした!？」

一気に変な汗が噴き出るのを身に覚え、片膝立ちであわあわと両腕をあげる仁美。

けれど、雪絵はそんな彼女の様子も気にせずに、身を震わせ続ける。

「どうしたの。今の話に何か泣きそうになる事でもあったの？」

幾分、優しい声音で語りかける仁美に、雪絵はこくりと頷く。

「……うーん、そっか、ごめんね。何か余計な事まで思い出させちゃったみたいだ」

私が悪かったよ、と肩にそっと手を置いて、ゆるやかにふわりと雪絵の黒髪を撫でる。

その所作と、何よりこれだけ近くに身に寄られているにも拘わらず、普段のような脅迫的な警戒心が働かないのが雪絵には奇妙だった。しかし、それよりも今は、と首を横に振って仁美に応えた。

「違う……。嫌なことじゃない……」

目をごしごしとこすって、しばしばと見開きすると、普段の精彩のある目つきで言う。

「私は思い出していたんだ。あの日に魅た華のことを。春花さんの刀技を。…そのあまりの美しさを」

「……………」

しばし口が塞がらない仁美だったが、やがてニヤリと口を結ぶ。

「ふうん。そっか」

(この娘は、感動した時のことを克明に憶えていて、思い出すところなのに打ち震えるくらいに、それは偉大なモノなんだな。この娘にとっての春花さんか。なら悪い事をしたのは私かな)

本当は、案外面白いヤツなのかな、と思うけれど、仁美はそうは言わずに碎けて見せた。

## 第一章 太刀の参

---

「ってというか、思い出し泣きかよ。可愛いところあるじゃん。あははは！」

肩をバシバシと叩いて、明朗快活に笑う仁美。

ここで何故笑われるのか、とんと理解が出来ない雪絵。けれど自身が醜態をさらした、という意識はあったのだろう。キツと仁美に顔をあげ、睨む。

「……春花さんの刀技は、凄い。華麗で、綺麗だ。そこには、確かに強い『心』があると、私も思う」

「ん」

と、仁美は気がストンと静まったように笑いを止めると、元の顔に戻って跪坐した。

「そうね。あの人が何でそんなに深くて、強い心を持っているのかは、分からないようで分かるよね。この郷の半分を治める頭としての器とでもいうか」

「頭としての器……。頭だから、強くて美しいの？」

「勿論それだけではないんでしょうね、実際は。あの人、頭としてよりも、武俠としての経歴が長いんだから……。それが獅士堂の頭梁としてだけじゃない、あの人という武俠のスガタっていうか、それか人生の重みってやつかなあ。聞いたような事を言うようだけれど」

その言葉に考え付くモノがあったのだろう。雪絵は声を正して言う。

「……うん、それは同時に、多分、春花さんは刀を振るった時間と、人を斬った数がモノを言っていて、あの子の強さになっているんだと思う。それがあの子の強さ……。輝きなのかも」

自分の中で積もり積もる、春花という崇敬の像を、そういうモノかもしれないと、雪絵は呟いた。まだ十全な理解だとは微塵も思わずに。

「うん。そうね。だからこそ、背負うモノとかあったんでしょうね、色々。それに私がかじったところによると、“獅士堂の太刀”は相手への惜しめない想いで成り立つそうじゃない。だからこれまで斬ってきた数だけ、春花さんは重みと深みを纏っているんだらうね」

「斬って来た数だけ、強くて美しい人。それだけ哀しくて辛い思いもして、何かを失って来たのかな……」

「でしょうね。それが武俠の道でもあるよ。皆ね」

「……………すごい人だ」

## 第一章 太刀の参

---

「凄いんだよ、春花さんは。アタシも10くらいの頃にあの人のシマでの立ち回りを近くで勉強させてもらったけれど、あの時からずっと、アタシの憧れだよ、あの人は」

「.....憧れ.....」

「ん？ またわかんない？」

「ううん。憧れか」

憧れずにはいられない、と続ける雪絵。

仁美は物珍しそうに目を丸くした。

(人が言葉を自分のモノにするところ、初めて見た)

「ふうん、成程ね。どうやら馬鹿じゃないらしい」

そうして、仁美は立ち上がる。

歩いて部屋の入口まで行く彼女を、雪絵は目で追った。

春の温度のある日差しに目を細めながら、仁美は庭を眺める。

「今日は良い天気だね。あんた、丁度いいからこれからいっちょ、試合でもしない？」

「？」

座したまま仁美を見遣る雪絵が、怪訝な表情をして応えた。

「あんたもそれだけ春花さんの刀技に魅せられた人間だ。技の心得はあるんでしょ？ 少しそれを見せてみなさいよ」

「.....なんであなたと太刀合うの。知らないよ」

「なにそれ。アタシだって腕に覚えがあるのよ。あんたこそ、即座に受けて立たないって、自信がないのかしら？ ん？ ん？」

なんだか幼稚な挑発だな、と思うものの、そこまで言われて黙っているのもなんだから、と雪絵はゆっくりと立ち上がる。

「いいよ。やろう」

「面白くなってきたわねえ」

と、つぶやく声があった。

「姐さん、静かにしてください。バレますよ」



## 第一章 太刀の参

---

「ん～。仁美ちゃんはともかく、雪絵ならもう判っている気もするけれどね。

あの子、気配に聡いし」

「そうかもしれないですが、この場合責めを負うのは俺なんですが」

「まあっ 自分もさっきから言い出したい事を固唾に変えて呑む風だったくせに、無理しちやって」

「……お前達、楽しそうだな」

しぶい声に反応して振り返る男女二人。

応接室の隣室で、聞き耳を立てていた春花と左馬ノ介であった。

「白峰さんも見ていきなさいよ。気になるでしょ」 という言葉に抗えず、同席していた白峰が、溜息をつく。

「お、始まるっぽいですよ。獅士堂対清家のお嬢同士の太刀合いとは、興味深いですね」

「逢って1時間とせずに刀を交えるなんて、私の想像よりも面白くなってきたわね」

「まあ、刀技の腕で観るべきではないですね。あのお嬢の器量が顕れますね」

「そうねえ、たぶん雪絵は手加減しないだろうから、仁美ちゃんがどう出るか」

「お前達、本当に楽しそうだな」

春花と左馬ノ介が二人そろって親指を立てて、ニヤリと笑んだ。

(何こいつ……、はやくて、おもしろい)

「私の勝ちね」

木刀の斬尖を下げて、もういいだろうという声を出したのは雪絵だ。

屋敷の整った緑が広がる一角。白い花々が見守る場での二人の少女の太刀合いは、当初、寸止めで三本勝負というルールのもとに火ぶたを切った。

だが、ものの2分とかからずに、仁美は圧倒的に打ち負かされた。

わずかの交差にも拘わらず、手のしびれと、躰の挙動からくる息の乱れ。それより何より――身に走る戦慄。

(こいつの打ち込み……受け太刀の衝撃もそうだけれど、なんであんな着物の帯と裾で、あんなに機敏に動けるんだ?)

それらを与え、見せつけたのは、目の前の長い黒髪の少女だ。刀を振るうう

## 第一章 太刀の参

---

えで、その髪の高さを意に介さないばかりか、格式ばったよそ行きの着物でありながら、何不自由なく刀を振るう——瞠目する程に自らを压倒する業前。

（ぐ……、悔しい……ッ）

「もう一本だ！」

「……………え？」

仁美は木刀を強く握りしめて、バツと立ち直り、声を荒げて雪絵に迫る。

「もう一本勝負！ 勝一負——ッ！」

そう言って仁美は強引に打ちかかる。それを巧く受け太刀し、いなし、身に突き刺さる一撃を雪絵はこれも寸止めしてみせる。

「くっ もう一本！」

「え……………」

再戦。身を躲して素早く腹に柄打ちを寸止めする。

「むっ もう一本よ！」

重戦。渾身の身を入れた突きを払い、首に刃を向ける。

「ぐうっ もう一本——！」

しつこく挑んでくるのを返す。斬尖を流し、腕を刀身に絡めて手首を軽く極める。

「——もう一本よッ いくわよッ」

これも大腿に一撃が寸止めで炸裂した。

「もう一本——っ」「もう一本！」「もう——本！」

あがる仁美の声。それから二十本以上の刀を交わした雪絵と仁美。

最後にはぜーぜーと息を切らし、仁美は庭の芝生に仰向けになって倒れ込んだ。手がしびれ、顔が紅潮し、汗で髪が顔にへばりついている。

風が熱を帯びた皮膚に当たって、妙な気分だった。

「はあっ ——はあっ はあっ……はあ、……………はあ」

困り果てた顔をした雪絵が（それでもやはり太刀合いに手を抜かなかった。全勝だった）仁美の顔を覗きこんだ。

「……………大丈夫？」

仁美が顔を歪めた。口をへの字に結んで、瞳に水分を滲ませ、しかし次いで大口を開けた。

## 第一章 太刀の参

---

「あははははははははははははははっ!! まっけた——っ! あはははははははははははは! アタシ、ボロ負け——っ」

あはははははははははははははははと豪快に、尚も笑う仁美に、雪絵は全然意味が分からない、と困惑しきった貌になっていた。そんな彼女に地面に寝転んだまま仁美は言う。

「くくくっ あんた、強いねえ。これは春花さんに気に入られる訳だわ。あはははははははははははははは」

尚笑い続ける姿に、いい加減に雪絵がこの子はどこかおかしくなったのか、とおろおろキョドキョドとし始めたので、仁美は苦笑して木刀を握る方の手と反対……空いた方の手を指し出した。

「もお、相手が倒れていたら、手を差し伸べて起こしてくれてもいいんじゃない? 死した者に哀悼を。そういうのはまだ学んでないのかしら」

かけられた言葉に、気後れするように一瞬口ごもり、雪絵は応える。

「……………あ、うん」

雪絵は仁美に片手を指し出した。

その手を掴んで、仁美はニヤリと笑んだ。

「アタシもあんたの事、気に入ったよ、雪絵」

刀を振り慣れて強張った肌の手には、汗と体温を感じていた雪絵は、その言葉に慣れないモノを感じて身を振った。

人と手を繋ぐのは、初めてかもしれない。

春の花卉が踊る日々のある風景——それは少女たちに刻まれたかもしれない。

……続く。